

桜蔭俳話会 十二月句会 (第三三一回)

平成二十六年十二月二十一日(日)

会場・旭区民文化センター(サンハート)

5点	鯛焼の尾の温かき年惜しむ	秀一
3点②	火山帯隠して美しき冬紅葉	明美
3点①	蠟燭の炎の影や年惜しむ	秀一
3点①	年行くや棚に残りし桐の下駄	清子
3点①	句集手にしづかな時間年の暮	守
3点	もののふのやぐらあまたや山眠る	友子
2点②	外套脱ぐ空気の層を脱ぎにけり	守
2点①	盲導犬澄んだ眼の冬帽子	幸
2点①	目力を虚空に置きざり枯蠅	才美
2点	雪合戦育ち盛りの前頭葉	才美
2点	凍て襲ふ風のうなりに病む身かな	清子
2点	靴下を繕ふ母の冬日和	ヤエ子
1点	ラーゲリの五万の命凍土化す	幸
1点	鳥けもの吾も子連れや寒夕焼	才美
1点	四ツ割りの冬至南瓜の色濃くて	ツル子
1点	投票日まづは雪掻みな老人	明美
1点	大根引く屈みたる背に富士の山	ヤエ子
1点	冬耕の鋤の光るや山鴉	ツル子
1点	此の暮もトランペット聞く慈善鍋	秀一
1点	新しき朝日さし込む屠蘇の窓	邦子
1点	山茶花やいつもの犬と行き合ひぬ	清子
1点	一木の枯れて祈りのかたちかな	守
1点	過去想い未来を生かせ除夜の鐘	邦子
1点	こめかみのぴりりぴりりと深雪晴	守
1点	大根洗ふ底に溜まりし土光る	ヤエ子

※ 冬の園足おぼつかぬ鬼ごっこ

玄関に大工道具や年用意	邦子	ヤエ子
しぐるるやひとりやつとの切通	友子	友子
やぐらへ散る銀杏や西方浄土めき	友子	友子
福寿草川崎大師福寄せる	直子	直子
松の奥霜柱手に嬉し顔	ヤエ子	ヤエ子
列はぐる山路や笹子鳴いてをり	友子	友子
かじかみし手を揉みながら朝の道	邦子	邦子
一筆箋の切手選ぶや十二月	秀一	秀一
死の影に対峙して観る枯尾花	眞壽	眞壽

静もりし鎮守の杜の煤払	ツル子
一連の光る干し柿軒先に	眞壽
初富士やホームの年寄生さる力	直子
尼宮の紅葉に託す人形寺	幸
ガリレオのごとき幼や冬ぬくし	明美
大晦日紅白見ずに酔い潰れ	眞壽
古希祝一本の薔薇芽が出でし	直子
船に積む車両「のぞみ」や冬の星	明美
歳晩や白衣揺がぬ聖歌隊	秀一
マフラーの色は家族の絆かな	守
柿の色動かなぬ人の絵画展	ツル子
酉の市はぐれぬように手を握り	眞壽
紅葉寺案内指差の異人かな	幸
山眠る波は波囃む日本海	才美
陽の恵みあれば山茶花色も良く	邦子
切岸の各層の史や冬さるる	友子
玄関を拭き掃除する年の暮れ	眞壽
抜き足の銀杏並木へかさこそと	ツル子
蒸し上ぐる蒸籠の摺り身冬日和	明美
万両や赤実は美味と鳥つばむ	直子
月冴ゆる上る丁稚の屋根裏部屋	幸
風花の陽を照り返す殉教碑	才美
新年は枯木の下に芽ふくらむ	直美
(不在投句 古野明美、原田清子)	

「事務局からお知らせ」

○第一一六回通信句会作品募集

冬に属する季語を用いた三句。締切りは、二月五日(木)。同封の葉書でお送りください。

○一月の句会

・日時 一月二十五日(日)
 十一時より、二俣川駅相鉄ライフ四階「仕立て屋」で新年食事会。その後、午後一時から、旭区民文化センター・サンハートで句会開催。

○二月は、句会は休みです。